

同窓会だより



2019年10月20日 第20号



今を、歴史とともに

教育学科同窓会会長 比佐 實

私たちの社会は、74年間（1945年－2019年）、戦争のない時代を経過しました。今年も、平和への願いとともに、暑い夏8月（広島・長崎・終戦）を迎えました。何が求められ、何が語られたのか。将来への展望を有することができたのか。多様な価値観が対立する時代に責任ある自立した個人として生きるには？

M. ヴェーバー（ドイツの社会学者。1864年－1920年）は、歴史（のダイナミクス）を“理念と利害状況”の相関として捉えます。「人間の行為を直接に支配するのは利害であって、理念ではない。しかし、理念によって作りだされた〈世界像〉は、きわめて頻りに転轍手として、軌道（の方向）を決定し、その軌道に沿って利害のダイナミズムが人間の行為を推し進めてきたのであった。」（「世界宗教の経済倫理」序説 1915年－1917年。河出書房 世界の大思想II - 7 ウェーバー宗教・社会論集より）多く示唆に富むものです。

私は、青山学院大学で学問をする機会を得ることができました。大学で学んだ一人として、大学への思いとともに、その意義（教育と宗教・キリスト教、ミッションスクール等）を改めて問い、又、大学との関わりを、校友会・同窓会を含め、考えてまいりたく存じております。

同窓会は2020年、東京オリンピックの年に創立20周年を迎えます。皆様のご理解ご協力をお願いいたします。

CONTENTS

会報第20号

巻頭言 今を、歴史とともに（比佐 實 '73）	…	1
ご挨拶（教育人間科学部教授 遠藤 健治）	…	2
2019年度教育学科同窓会主催講演会録	…	3～5
講演会の感想（佐藤 英二 大学部会副部長）		
校友会、コンサート等報告	…	6～7
青山学院大学の駅伝への思い（斉藤満智子 '93）		
クラス会報告（浦上 義夫 '59）	…	8
わたくしの今… ー皆さんの三行消息ー	…	8～11
会費納入一覧	…	11
2019年度（第20回）総会報告	…	12



遠藤 健治先生

本年度からウェブサイトの更新に心掛けています！

このページの冒頭「URL」には、校友会の中の教育学科同窓会のウェブサイトが立ち上げられています。今年度は**11月9日に相模原キャンパスツアー、3月28日に東京新名所探訪（豊洲・築地ツアー）**が予定されています。こうした情報も掲載していきますので、ぜひチェックしてみてください！



ご挨拶

遠藤 健治

教育人間科学部は、2009年に設置され、今年ちょうど10周年を迎えました。そこで、これまでの経緯を少しおさらいしてみましょう。とくに教育学科と心理学科が“別れたり”“一緒になったり”という変遷について知っている方も少なくなりましたので。

まずはご存じの通り、1950年、文学部に教育学科および第二部教育学科が設置されました。私立大学の中でいち早く特色ある教員養成を行うことを目的の一つとして誕生したのです。心理学は其中で「教育心理学」として教員養成に寄与する役割も担っていましたが、独自の学問分野としても心理学専修コースというカリキュラムを構築し、教育学科の中に教育学と心理学という二つの専門分野が併存しました（1958～1974年には大学院の修士課程・博士課程がそれぞれの専攻ごとに設置されています）。しかし心理学専修コースは独自の「定員」と「予算」を持っていなかったため、当該年度の履修登録が済まない具体的な授業計画が定まらず、履修人数増により実験機器や教室、教材等を確保できないという科目運用上の危機に直面することが多くなってきました。学位記に「心理学」を明示してほしいという要望も学生から多く聞かれました。そこで、名実ともに自立した教育・研究プログラムを提供すべく2001年に文学部心理学科として独立するに至ったわけです。分離独立したとは言え、ケンカ別れをしたわけではないので、それ以降も教育学科と心理学科は相互履修を促進するなど、一体感をもって教育目標・人材養成の目標を追求してきました。そうした中、2007年度の財団法人大学基準協会の文学系第2専門評価分科会・見解で、(当時の)文学部は全体としての一貫性・一体性が不明瞭であるという指摘がなされました。伝統的な人文学的手法を主な研究方法とする英米文学科、フランス文学科、日本文学科、史学科と、実践のフィールドを背景に持ち、ひとりひとりの人間を考究の対象にする教育学科・心理学科とは、学問上異なる系統であるということです。そこで、この2学科で新たに「人間の教育、心理、発達を扱う学問分野に基礎を置き、様々な社会や環境の中で成長・発達し、より良き生(well-being)を主体的に追い求める人間を研究する」学部を立ち上げたという経緯です。

2019年の学部創立10年記念行事には、教育人間科学部の卒業生ばかりではなく、文学部教育学科、心理学科の卒業生も数多く参加していただきました(比佐会長にはパーティでご挨拶もしていただきました)。学部の名称や形態は変わっても、本学部のポリシーに共感・賛同をもっていただけたのだと思います。今後ともご支持のほどよろしくお願いいたします。



2019年6月8日、青山キャンパスガウチャー記念礼拝堂で、モーツァルトのレクイエム弦楽四重奏版の演奏会がありました。実はこのコンサートは、東日本大震災復興支援コンサート実行委員会が主催し、青山学院大学法学部同窓会をはじめとする、教育学科、英米文学科、フランス文学科、史学科、経営学部の各同窓会が共催する、被災地を支援するボランティア活動の一環でした。この企画は2012年よりスタートし今年で8回目となるそうで、東北を忘れない、見捨てない、支えたい、という関係者の思いが継続されていることに敬意を表します。

一方、大学では2016年ボランティアセンターという組織を立ち上げました。これは、学生たちが主体的に全国の被災地にボランティアとして支援活動を行ってきたことを前駆とし、大学が、学生たちをサポートする組織として学生へのボランティア活動情報・機会の提供や社会貢献活動の一端を担おうとするものです(因みにセンター長には元教育人間科学部長の鈴木眞理教授が就かれています)。思えば、関東大震災の時も、青山学院は、自分たちの校舎が壊れているにも関わらず、被災者や流言により被害・迫害を受けている人々の支援をしたのです。こうした、窮地の人を助ける、他者に与える・仕えるというスピリットが、青山学院での学びの一つのコアになっているのでしょう。

いずれにしても、青学で学んだ先輩方が、「よき隣人」であることを実践的な行動として学生たちに示していただけるのは大変有り難いことです。前節の繰り返しになりますが、今後とも学生の育ちにご協力いただけますようよろしくお願いいたします。

プロフィール

1982年青山学院大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程所定の単位取得済み退学。

1984年青山学院大学文学部教育学科専任講師に就任。1989年同助教授、1998年同教授。

1997年12月から2003年3月まで青山学院大学 情報科学研究センター副所長。

2001年4月から文学部 心理学科 教授。2002年4月から2008年3月まで文学部心理学科主任。2009年4月より教育人間科学部 心理学科 教授。

2015年4月より2019年3月まで青山学院大学 大学院教育人間科学研究科心理学専攻主任。

2018年10月1日より2019年3月まで教育人間科学部長代行、2019年4月より教育人間科学部長、現在に至る。

日本心理学会、日本社会心理学会、日本感情心理学会、日本繊維製品消費科学会等に所属。

教育学科同窓会主催 講演会



と き：2019年5月18日（土）14時～15時30分
ばしょ：青山学院大学 第4会議室（6号館）

青山学院大学のこれから ～大学の存在の意義を考える～

青山学院大学学長 三木 義一 先生

【三木 義一先生のプロフィール】

- 1973年 中央大学法学部法律学科卒業
- 1975年 一橋大学大学院法学研究科公法専攻修士課程修了
- 同年 一橋大学大学院法学研究科公法専攻博士課程中退
- 1998年 ドイツ・ミュンスター財政裁判所客員裁判官
- 2009年 政府税制調査会専門家委員会委員
(納税環境整備小委員会座長)
- 2010年 青山学院大学法学部教授
- 2015年 青山学院大学学長 (法学博士・弁護士)



「新生 青山学院大学」に向けて改革に取り組まれている三木義一先生にはファンが多い。学生ばかりでなく、卒業生 OB・OG にもファンが多いのは、先生の親しみのあるお人柄によるものなのでしょう。

講演会では、大学を愛してやまない先生のお気持ちが、言葉の端々に垣間見ることができます。～地の利が良いだけでなく、ちゃんと研究も勉強もしている。素敵な大学という良いイメージを強めたい～。

先生が学長（2015年）に就任して以来、大学には変化が見られます。キャンパスの環境・インフラの整備が進み、クリーンになり雰囲気明るくなりました。BOOK CAFE（学生会館7号館1階）ができました。何よりも“青学TV”の発信は、従来、内向きであった大学のイメージを一新するのに十分でした。駅伝だけではありません。大学は、明らかに変わったのです。

講演中、先生は、大学（青山学院）のあり方を、運営（経営）から教学と、多岐にわたり話をされました。以下は、そのあらましです。

[講演会のあらまし]

1. ドイツでの経験 ～私の原点～

私は、法律家で税法を専門としています。初めに、ドイツ財政裁判所の裁判官時代に経験したことです。

ドイツには、税金専門の裁判所があり、税金裁判の件数を調べる機会がありました。ドイツでの裁判件数が年間3万～7万件あり、日本の100件と比較すると雲泥の差です。この要因を調査したところ、ドイツは賦課課税制度（ヨーロッパ全体が同じ制度）であり、日本の申告納税制度とは制度上の相違があり、それが訴訟数の違いを生み出していることに気づきました。安易な結論（ドイツ人と日本人の意識が違うという民族論）に陥ることなく、真実に至ることができ、また、人間としての共通性の相互理解の大切さを認識した次第です。ドイツの裁判所・税務関係当局の方々の心温まるサポートにも感謝です。

このドイツでの貴重な経験が、私の考え方・学究生活に色濃く影響していることは言うまでもありません。

2. 大学との関わり

「青山学院大学のこれから ～大学の存在の意義を考える～」というテーマをいただいています

が、久しぶりにゼミに戻ってきたつもりで、大学の「強みと特色」について率直な話をし、皆さんとともに、考えていきたいと思えます。

私は、2010年に大学法学部教授に就任しました。前後して、2009年8月、日本の政治で政権が代わる時を迎え（自由民主党から当時の民主党）、私は、税法の専門家として時の政権に係わることになりました。しかし、民主党政権は短命に終わり、途半ばにして断念を余議なくされました。

これを機会に、大学の仕事に専念し始めたら、学長に選出していただきました。大学（青山学院）では、責任ある立場から明確な問題意識とともに、大学がおかれている状況・問題点を的確に捉えることを心がけました。内実を知るにつけ、その将来について、可能性とともに、課題が見えてきました。

大学は、潜在的に良い大学になる可能性を秘めています。立地に恵まれていること、また「キリスト教精神」に基づいた教育が貫かれていることが、何よりも特長として指摘されます。人に優しい大学として、明るく爽やかで、また「英語の青山」としても良いイメージを持たれています。

私は、学長として、任期中（4年間。2015年－2019年）、この限られた期間と権限の中で、大学の価値を高めるため、大学の経営（運営）、並びに大学の本分である教学（教育研究の取り組み）を大学及び関係者の多くの方々の意見に耳を傾け、ともに考え、可能な限り改革・実行に努めたいと思いました。

2-1 財務・組織の見直し

私は、先ず「新生 青山学院大学」に向けての取り組みを、大学の運営（経営）について、財務・組織の実態を把握することから始めました。

青山学院は、ご承知のとおり幼稚園から大学・大学院を有する文系・理系を含む総合学園です。しかし、大学は、その法人が設置する学校の一つとして位置づけられており、学校法人青山学院大学ではありません。したがって、大学（学長）には、そんなに強い権限が与えられておらず、本来教学の最高責任者であるはずの学長に副学長の数すら決定できないありさまで、このような制約のなかで、大学の財務・組織体制の見直し等について、取り組みを行い、今日に至っています。

財務体制については、青山学院全体が絡む問題ですが、大学の予算のあり方（執行状況を含む。）から経費削減（公用車の廃止、法科大学院の廃止を含む専門職大学院の見直し）等に至るまで、身を切る思いで、見直しを実行しました。

青山学院が輝くためには、大学教学が中心になって、大学中心に動ける体制にしないとまずい、と真剣に思っています。

2-2 大学改革に向けて教学で輝く ～知的な取り組み～

青山学院大学は「おしゃれで素敵な」大学との定評を受けています。私は、それに加えて「知的な」大学でもあるとの評価も得たいと考え、以下のような新たな試みを実施してみました。

《本学唯一の取り組み（ONLY ONE）》

まず、大学の特長を活かした独自の取り組みです。それが、(1)全国児童養護施設推薦入試、(2)シンギュラリティー研究及び(3)司法通訳養成講座でした。

(1) 全国児童養護施設推薦入試

経済的に大学に進学できない児童養護施設の子どもたちを受け入れる制度で毎月の生活費も、卒業にいたるまで大学が保証するものです。1年目は男女1名ずつでした。

教職員の皆さんの「青学らしくてよかった」との後押しがあり、東京新聞が記事にしてくれました（東京新聞2018年12月18日朝刊）。

(2) シンギュラリティー研究

おしゃれで素敵な大学だけではない、知的な大学をみざす取り組みです。

世の中がAIの流れが主流となりつつある中、AIが人間を超えてしまう時代がやってくるかもしれない。そこで、シンギュラリティー現象下の人間社会での在り方を文系の学問（意識的に）で考えようと研究所を立ち上げました。現在、構想過程にある「近未来型の図書館」を想定し、その中でシンギュラリティー時代の教育のあり方を考えていきたいと思っています。「文系は負け組なのか」と新聞はよく書きますが、テクノロジーがどんどん発達していく時代だからこそ、文学や教育のあり方がますます生きてく



講演会の様子③

るのです（朝日新聞 耕論2019年1月16日朝刊）。

昨年、その一環として、大学で「シンギュラリティー研究の連続基調講演」を開催しました。また、朝日教育会議でも「AI時代の大学教育 — 〈人文知〉VS〈専門知〉」をテーマに、福岡伸一先生を中心にシンギュラリティー問題を取り上げてもらいました（15大学×朝日新聞による「未来を切り拓く」大型シンポジウム。朝日新聞2018年12月15日朝刊）。

(3) 司法通訳養成講座 （2019年4月開設）

そして、多様化する教育ニーズへの対応としての「司法通訳養成」の取り組みです。

「英語の青山」と言われてから久しく、その復権を含め、第二外国語のメッカである東京外国語大学と大学（法学部）をマッチングさせて「司法通訳養成講座」を立ち上げました。スペイン語、ポルトガル語、ヴェトナム語から始めました。多くの応募者があり、レベルも高く、成果をあげています。これまでの大学では考えられない他大学との連携による具体的成果で、特筆されてもよいように思っています。

《卓越した取り組み》

《本学唯一の取り組み（ONLY ONE）》だけではありません。文系・理系を問わず、他大学と比較しても優れた取り組み・成果があります。

大学の研究開発面では、文系学部の陰に隠れてきた理工学部が産学連携・社会連携を本格的に展開し始め、企業との共同研究が加速し、かつ科学研究費の増大が実現し始めています。「NATURE INDEX 2018 JAPAN ランキング」では、有益な論文が出ている大学として第5位にランクされています。

また、大学のグローバル化の推進にも力を入れ、海外の協定校を大幅に増やしたところです。

《個性的な取り組み》

大学の価値を高めるのは、教育・研究だけではありません。大学への思い・誇りとともに、歴史（伝統）の継承と感謝の意味を込めた取り組みが必要です。青学TV、外灯フラッグ・母の日のセレモニー(青山学院は発祥の地です)などはその一例です。また、青山学院のみならず、青山通りの象徴とも言える「銀杏並木」の維持・再生は、現在専門家の意見を聞きながら検討しているところです。

これら取り組み・成果とともに、大学の偏差値が相当レベルにまで向上しています。これは、東京都内の大学の定員抑制、本学の学部設置に伴う合格者抑制が影響した可能性も高いのですが、青学は私学トップクラスの大学であるとの評価が定着してきたように思います。

なお、マスコミの評価も高く、私立大学の序列は、「今や、JAWの時代だ」（上智・青山・早稲田の入試方法が共通している）とする大学関係者もいます。

以上話したように、青学が素敵な良い大学であることは、間違いありません。しかし、取り組むべき・発信すべきことは、たくさんあります。とりわけ、大学が法人の中心として、大学の権限を強化する必要があります。恵まれた立地条件があるので、このキャンパスを大学を中心に発展させることに心がければ、さらに伸びるだろうと思っています。重ねて言いますが、大学が輝いてこそ、初めて青山学院全体が輝くことができるのです。



3. 終わりに ～現状に満足することなく～

私は、2015年の学長就任以来、「新生 青山学院大学」に向けて、大学を運営（経営）及び教学の視点から取り組んできましたが、未だ緒についた段階です。私は、大学・青山学院の現状について、「ガバナンスの欠除」と「多く課題・改善の余地を残している」ことを指摘するのに止めます。

大学・青山学院は、現役世代（理事長等の経営層、設置学校の長、教職員、学生）だけのものではありません。校友のものでもあります。大学の卒業生 OB・OG は23万人を超え、青山学院全体では37万人に及んでいます。

皆さんにおかれては、この現実をご認識くださり、現役世代・校友の皆さんが、大学への思い・誇りとともに、一体感をもって、大学・青山学院の将来に向けて、ご理解ご協力くださいますようお願いいたします。